



TITLE:

<批評・紹介> 支那宗教史(支那地理
歴史大系第十一巻)

AUTHOR(S):

宮川, 尚志

CITATION:

宮川, 尚志. <批評・紹介> 支那宗教史(支那地理歴史大系第十一巻). 東洋
史研究 1942, 7(2-3): 181-185

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138827>

RIGHT:

支那宗教史 (支那地理歴史大系第十一卷)

昭和十七年二月二十日 白揚社發行

三八三頁 定價 三圓

本書は本邦において恐らく最初の支那宗教史として纏められた編著であり學界や一般讀書界に歡迎されてよい意義をもつてゐる。たゞし弁言に云ふ如く、開拓路上にある支那宗教史の研究狀況は諸宗教の消長更替の變遷過程を一人の手で綜合編述することを困難ならしめ、數人の専門學者による支那固有若くは外來の諸宗教の分擔執筆といふ形をとらせてゐるが、蓋し己むを得ないところであらう。以下各章毎に簡單な紹介と若干の感想を述べさせて戴きたい。

第一章 支那古代宗教思想 (四四頁)

森 三 樹 三 郎

支那古代には組織された宗教思想は求め難いが、諸種の崇拜や祭祀の宗教的な事實からその宗教思想を導き出すことは可能

であり、現實的合理的な儒教思想にもやはり宗教的な要素は見
出されると序し、ついで自然現象に關する崇拜にはまづ天の崇
拜があるが、これは天空そのものの崇拜といふより、そこを住
處とする祖先神(帝)の崇拜の要素がつよい。後に君子鯨を根拠
づける儒家の政治的要求から天の有した人格神の性質を除き宇
宙の理法となしたが、祭天の儀式の存続によりその宗教的性質
は全く失はれなかつた。次に日月の崇拜が存在せず星辰崇拜
が一般的であつたのは春秋戰國の多元的社會と農耕生活、祖先
崇拜と關聯あり、社の崇拜は集團精神の標識たる意味をもち、
總じて自然に對する驚異ではなく社會生活への關心がこれらの
所謂自然崇拜を生んだもので、かゝる宗教思想も社會的條件か
ら説明されると主張される。更に祖先崇拜は家族結合の原理に
る孝が延長擴大され宗族結合の基礎を生前愛情で繋がれてゐた
死者への崇拜に求めたものであり、支那人の靈魂不滅の欲望に
ある程度の満足を與へたが、しかしその本來の機能は一氏族内
の生者の結束にあり、民族結合の原理はかへつて姓を有しない
天の思想に求められた。支那の神々の性格は平和的な特徴があ
り、人格的活動に乏しく神話を伴はないのは古代支那の治水事
業中心の平和な社會狀態の反映であると共に、その祭祀階級に
は世俗的な君主や官僚が當つたといふ祭政一致の現象にもよる
もので、支那の神々は現世のために存在し永生の希望を達せし

める資格をかけたことが後年佛教を迎へざるを得なかつた理由
であると結論されてゐる。

説明すべき問題の重點主義による配列、明快な筆觸、不確か
な通説への批正に見られる良心的態度は本章の價値を示す。
種々の宗教史的事實の發展過程ではなく豫め取り出したところ
の古代支那の宗教現象存在の社會的理由に對して追究が試みら
れてゐる。卜辭の時代から漢室の解體期に亙る古代社會の宗教
思想のより詳しい論述は、儒教の宗教的要素、支那古代のシャ
ーマニズムに關する説明と共に著者の今後の研究に期待せねば
ならぬ。

第二章 支那佛教史 (二四八頁)

塚 本 善 隆

支那佛教史界は他の東洋史の諸部門とかはつて不思議にも精
細な特殊研究の歩武が進められてゐなかつた當初から十指にあ
まる概説書を有した。その後一般歴史學の潮流と合して史料學
的準備を整へ、かつ佛教學の羈絆を脱せんと試みつゝ特に教團
史方面の諸問題がとりあげられ、また一般教理信仰方面にも新
構想を盛つた研究がなされ、今やこの兩方面の特殊研究の成績
を綜合して新しく權威ある概説書が著されつゝある時期に入つ
た。著者はかゝる支那佛教史學發達の各期を通じ顯著にして影
響力ある活動を續けられてきた。

本章の記述を仔細に注意すれば學界の新研究の結果といふよりは正に向ひつゝある趨勢を鋭敏に察知して早くも一步を進めた考究や示唆が與へられてゐるのを感じる。序説には支那佛教とは各種の時代民族徑路によつて支那に傳へられた釋迦佛をひとしく教祖と仰ぎ成佛を求める教であるが、教理や經典を異にした複雑混亂した諸宗派を支那人が自己の宗教とし哲學として選擇綜合受容して成立せしめたものであり、その結成は唐中期迄であり、その後は外來の影響力は少くなる。又教團の完成も宋元時代までに行はれ、以後佛教は時代文化を荷擔し得なくなつたと述べられる。ついで「傳來初期の佛教」として後漢三國西晉時代を「教團の發展と教義の研究」として東晉南北朝時代の佛教が詳細に互つて記述されてゐる。讀者は同じ著者に成る支那佛教（理想社世界精神史講座支那精神）「魏晉佛教の展開」（史林二十四ノ四）等を併せ看ることによりその著者の學說をよりよく理解することができよう。ついで隋唐時代は支那諸宗派成立の時代であるとし、朝廷の佛教保護と佛教界隆盛の狀況を述べた後、三論・天台・唯識・華嚴の教理について説明せられてゐる。これらの諸派が外來佛教の支那的展開であるのに對し、支那人の現實の自己についての省察が深くなるにつれ眞の意味での支那佛教——支那人自らがいかにして悟り、いかにして救はれるかを實踐的に解決せんとする宗派が成立した。

即ち禪宗と淨土宗とであり、ことに後者については龍門石刻を資料とし、末法運動を概観しつゝ哲學的汎神教的傾向の著しかつた六朝佛教が唐代淨土教において基督教的展開をなしたと結論される。更に三階教と密教との簡單な説明の後に、全體の結論として「近世佛教の衰微」と副題されてゐる。會昌の破佛から五代の亂世をべて北支の佛教は大打撃を蒙り、江南を中心に禪と天台とが榮えたが寺内僧侶の獨占佛教となる傾向あり、一方佛典の翻譯・印行、寺院僧尼の量的増大により佛教の勢力は表面は大であるが、空名度牒の濫賣による教界の質的低下は佛教の指導的地位を失はしめ、子元の白蓮宗運動の如きも邪教化せしめられ佛教革新の契機と成り得ず士大夫階級には排佛論が瀰漫し、大乘佛教徒も自己を否定して佛教を社會に實現する努力をつとげず、戒律においても四分律を捨てゝもつて支那大乘律を成立せしめる迄に進まず、禪寺の清規も活動性なく、次第に衰微してゆく佛教界には現在に至る迄これを振興する天才が現れてゐないと筆を結ばれてゐる。

著者が明確に指摘された如く支那近世佛教衰微は支那宗教史の重要問題たるを失はぬ。著者は支那佛教の結成を本章の主題にし隨つて唐宋までの敘述に主力を置いてゐられるが、吾等はむしろ近世佛教史について著者の達識による具體的説明を得たかつた。けだし近世佛教の頹落は宗教的には價值少くても宗教

史的に取り上ぐべき重要な意味を持つてゐるからである。もつともこの問題は更に廣く深い社會史的、はた思想史的見地から探り上げられねばなるまい。

第三章 道 教 (五八頁)

内 田 智 雄

本章において記述が與へられてゐるのは三國時代の三張の原初道教迄の範圍である。こゝに先づ吾等は不満を感じる。尤も著者は自分の研鑽及ばざる爲と謙遜せられ道教史取扱の立場に關する省察と、神僊思想と三張の道教の關聯の究明に主力を傾けてゐられる様に見える。第一節道教所傳の道教史と題し雲笈七籤所收の道經の本文を多数引用し道教の開闢説を紹介し、教理史的に道教史を何れの教祖（元始天尊、老君、老子、張陵）から始めるべきか自問自答してゐられるのは、その主觀的意圖のまじめさは窺はれるにしても、實のところ私には始め理解し得なかつた。この珍らしい誤りは教理から史實を導かんとする著者の所謂祖述的歴史の立場にある。まづ道經及びそこに盛られた教理が歴史的時間の中に生成し作爲されたものであることを考ふべきである。道經にとく道教史上の人物の實在を否定する積極的な證左に缺けてゐる等とは慎重すぎて理解に苦しむ。著者の力點は燕齊海上の神山、及び崑崙山に關する二系統の神僊思想を區別し、兩者の思想が張陵の道教に優越した影響を與

へたと論ぜるところに置かれてゐるらしい。しかし著者の論旨にも不明な點があり、結論として教理史的に三張の道教は悉く神僊思想に胚胎してゐるといふ三行後にはこれを宗教的な社會運動として社會史的に考察すべしとの單なる意見を述べ、要之こゝに發表されただけの研究も未成の點少くないことを示してゐる。道教成立前史のみを扱つたにしても寇謙之の事蹟に一言もふれてゐないのはいかにも淋しい。

第四章 支 那 回 教 史 (三五頁)

若 林 半

本章の叙述はともかく時代的に回教の支那傳來以前から清末現代までに互つてゐるけれども、その他の點では本巻中最も見劣りして杜撰といふ外はない。これは暇がなかつたとか研究が不十分だつたとかの著者自身の都合に基くならざるとにかく回教史研究の遅れた現状を少しでも反映してゐるとすれば宗教史家は發奮すべきであらう。數多き誤謬はしばらく問はず、今後の回教史研究によつて重要な問題となるべき個所のみをあげるとまづ著者は回教がいつ支那に傳はつたかを考定するのに努力してゐられる様であるが、これ固より一の課題であるが、より重要なのは何時から何故に回教が勢力を占める様になつたかといふことである。この點元代の回教と色目人の地位について考察を廻らすべきであらう。次に支那の回教は政治力を伴つて侵入

したものではないから支那王朝の権力下に教理信仰において支那化を免れなかつたといふ意味のことを指摘されてゐるのは結構と思ふが、明清の回教徒対策でも知られる通り、回民が他の平民と異つた信仰や生活様式を堅守し、支那社會の一部たるよりも回教圏の一翼として存在することは、實に現下の回教問題がやかましく論ぜられる理由である。かゝる反面もあることを考へられた上、この間隙をうづめる上層具體的な説明が與へられなく思ふ。

第五章 支那基督教史其の他 (八七頁)

藤 枝 晃

萬遍のない要領をつかんだ叙述と參考文獻の詳しい掲載は多數の寫眞と共に本章を特色づけてゐる。類書に時々見られる無駄で不確かな材料は一切省かれてゐるから讀者は安心のできる手頃な支那基督教の入門書を獲たと感ずるであらう。著者は自分とはもとゞ宗教史を専門とする者でないとして斷られ、限られた

紙數に前章迄以外の諸宗教を説明することの困難をなげかれ、また實に基督教の外には祇教と摩尼教の二について數頁が割かれてゐるにすぎぬのは已むを得ない。唐元から明末迄の記述については支那人の基督教受容の有様ではなく傳道者の來支とその布教の事實が列擧されてをり、かつ成程宗教自體の歴史よりもその齎らした文化・文物の記述が多いけれども、これも基督教傳來に隨伴した現象の指摘として取扱はれて差支へない。たゞ外來の基督教が支那文化に對する態度の變遷は典禮問題などを契機として可成り明瞭に見うけられるから、支那の官人或は庶民へ布教の重點が向けられてゆく變動の過程を意識して取上げれば、外的事件の經過をうらづける聯關が發見できまいかとも思はれるのである。

以上先輩畏友の勞作に對し充分の用意なしに蕪辭を弄した非禮を謝す。〔宮川尙志〕